

# 鶴川図書館大好き！の会の意見

－図書館管理職との意見交換（2021.10.5）の記録から－

2021.11.5.鶴川図書館大好き！の会 作成

● 私たちも会の発足から3年、鶴川図書館のあり方について試行錯誤しながら考えてきた。現時点での私たちの考え方を改めて示したい。

図書館側（中川さん）から、市民協働の形なら存続はあり得るということを示されたので、八王子市立なども見学に行った。しかし、やはり市民団体が図書館運営を担うということは、図書館の専門性の確保や継続性を担保するのが困難であり、直営で継続してほしいというのが結論である。その上で、「鶴川図書館応援まつり」とかいろいろな形で、図書館を盛り上げ充実させるという面で、市民として協力していきたいということだ。

市が、図書館運営を市民に委ねたいというのは、経済的に効率化したいという部分もあるだろう。その点について私たちは、会計年度任用職員を中心に運営する体制（常勤職員を極力減らす）にすることで、図書館全体の人件費を減らすことを提案したい。荒川区立の例が参考になる。そういうやり方で図書館は直営で運営し、市民は別のところで力を発揮して協力したい、というのが現在の考えだ。

● 鶴川で塾を経営しているものだが、文学館主催の「ショートショートコンクール」や別の「鶴川ショートムービーコンテスト」に、塾の子どもたちが参加した。子どもたちは大変興味を持って、驚くほどの発想力を発揮して作品を仕上げた。こうした催しが毎年あって、生徒にそのための指導をしてくれるような機能が近くの図書館にあったら、子どもたちもいっぱい図書館に来るのではないか。

学校の統廃合で、真光寺中が廃止され鶴川二中に統合される。鶴川二中は鶴川図書館の隣なので、大勢の中学生が鶴川図書館を利用するようになる。その時に、先生たちも含めて、知的スキルをきちんと提供するという機能が鶴川図書館に付加されるべきではないか。閲覧室ももっと広げれば、中学校に即応した教育機能を持った良い図書館になるだろう。町田市として、そのへんを打ち出してほしい。

● もうひとつ、英語多読の会をやっているが、いま日本の英語教育で完全に抜け落ちているのは、中高校生向けの英語の図書だ。これまで中学卒業時に習得すべき英単語は1200語だったが、文科省が今年から2500語にした。でも、中学生に分かり易い英語の本は図書館にほとんどない。あるのは絵本か大人向けのペーパーバック。理科とか社会とか数学でも簡単な単語が勉強できる本や図鑑などが必要だ。鶴川図書館に、絵本とペーパーバックの中間にあたるような英語の本をたくさん入れてくれれば、子どもたちが自分で英語のプレゼンもできるようになる。

市の直営で、専門の司書がいて、学校の先生が授業の準備をするのに必要なこういう本を置いてくれと言えば、きちんと置いてくれる。そういう図書館であってほしい。市の直営だからこそ、学校や市民との連携もできるのではないか。

● 「鶴川図書館応援まつり」では、確かに地域を盛り上げるということも大事だと思っている。ただし、核にあるのはあくまでも図書館であって、ただ何となく本があるコミュニティスペースというのでは図書館ではない。それでは困るというのが私たちの主張だ。先ほど担当課長が「図書館としては残さない」と明言されたが、そこは考え直してもらわないと困る。直営としての図書館があって、その上で市民として協力したいと思っている。

● 鶴川駅前図書館は、駅を使う大人や学生、車で行ける人びとが使う図書館だ。徒歩の人はあんなところまで行けない。単純に距離だけで鶴川図書館はいらないということにはならない。地域の住民のために、ぜひ図書館として残してほしい。

● 鶴川図書館のもっとも大事な機能は、周辺の人たちが安心してすぐ立ち寄れて、専門の司書さ

んがいろいろ教えてくれて、そこで知的なものを吸収できるということだ。ものすごく大切なことで、そういうものがなくなるのは本当に大きな損失だ。高校で美術の教師をしていたが、子どもたちの本離れは深刻だ。小さいときから本に触れる機会がなくなると、この国はどうなってしまうのか。

●団地再生の観点からも、URが「コミュニティビルダー」というような人を連れて来て、若い世代を取り込もうとしている。さらに隣に大きな中学校ができるとなると、単純に駅前に図書館があるからここは要りませんよ、ということにはならない。Wi-Fi環境など若い人の需要に応えた、さらに充実した図書館にすることを考えるべきだ。

●図書館とは、博物館や美術館といった他の教育機関とは異なり、行政を支えるもっとも基礎的な施設だ。コミュニティ形成には空間としての場があるだけではだめで、そこで生活する人々に様々な資料・情報を提供する必要がある。それが図書館の役割であり、地域が必要とする機能なのだ。

●図書館は、行政が責任をもって運営すべきものというのが、私たちの譲れない主張だ。その上で、市民として協力することは吝かではないし、むしろ積極的に協力していきたいと思っている。

●館長はいま、市民の中には図書館が必要だという人もいるが、当然図書館なんかいないから、ほかのものを作れという人もいる、と言われた。確かに図書館に一步も足を踏み入れたことがないという市民がたくさんいるのは事実だ。そういう人たちの声を聞くということも意味がない訳ではないが、片方だけじゃなくて、図書館を何とか良いものにしたいと一生懸命に思って活動している人たちの声を、きちんと聞いていただきたい。

●図書館の管理職ではなく職員の方々はこのことをどう思っているのか、という点が良く見えない。市民の意見を聞く、聞く、と言われるが、図書館職員が10年後の図書館はこうありたいというイメージを示されて、それに対してどうかと言われるならわかるが、そちらからの具体的な提案がなく、ただ「何らかの形で残す」といわれても、意見の出しようがない。

●今日の話聞いていて、私たちが愛している図書館を、図書館の方たちが愛していないような気がした。どうすれば図書館を守っていけるのか、どのようにすれば図書館の機能で地域の知的活動を支えていけるのか、という熱意が感じられない。そういうことを図書館の方がもっと責任を持って、鶴川図書館を守るという気持ちでやってもらいたい。

➡この最後の意見に対して副館長：「まあ、お話しとして承りました。」

.....

## 10月5日の面談の図書館側の発言要旨(10月20日付で図書館から送付されたものを転載)

鶴川図書館は市全体の公共施設再編を検討し再編対象となった。今鶴川図書館は貸出数が10年くらいの間で約7割減っている。地域のニーズが時代と共に変化しているのだろう。これからは生活スタイルが変わり、もっと家で仕事をする人が増え、自分の時間が増える人もいるかもしれない。そのときに市民が地域で活躍できる場がもっと必要なのではないか。地域の方にとって良い場になるよう検討していく。

皆さんと鶴川図書館で実現したいことは同じことだと思う。これからも一緒に考えていきたい。図書館のあり方は大切だが、私たちは市全体を見なくてはならない。図書館をよく利用している方にとっても、そうでない方にとってもより良い場所になるよう地域との意見交換を続ける。今はまだ地域の声を集めている段階でこちらから提案を出す段階ではない。もっと多くの方から意見を伺ったら、どこかで我々の考えをお示しする 때가来るだろう。